



Title	信多純一教授の御退休にあたって
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	語文. 1995, 62-63, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68865
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



信多純一教授近影

信多純一教授の御退休にあたつて

伊井 春樹

信多純一先生が、平成七年三月三十一日をもつて御退休になる。松陰短期大学、奈良女子大学を経て大阪大学文学部に着任なされたのは昭和五十二年十月、すでに二十七年という、四半世紀を超える教育研究にあたつてこられたことになる。大阪大学に文学部の前身旧制法文学部が開設されたのは昭和二十三年十月、その初代国文学講座教授として着任されたのが小島吉雄教授であった。小島先生が昭和三十九年三月にお辞めになり、その後は昭和五十六年までの田中裕教授、そしてこのたび三代目の教授信多先生が本学をお去りになる。大阪大学文学部の歴史はすでに四十七年、信多先生はその大半の年数を国文学講座とともに歩んでこられただけに、かけがえのない先生をお送りしなければならなくなつたことは、大きな損失と言わざるを得ない。

私が信多先生を知るようになつたのは、かつて私が勤務していた国文学研究資料館文献資料部の最初の客員として、昭和五十二年六月から翌年の三月まで、当時東京大学教授（後に国文学研究資料館の館長）であった小山弘志先生とおいでになつたことによる。文献資料部のスタッフは九人、客員のお二人を迎えて部会なるものを一、二度開いたであろうか。客員にはどのようなことをお願いするのか、予算が付いたばかりで、私どもにも方針がなかつただけに、退屈なさつたに違ひない。私は、近世文学専門の方はあまり知らなかつただけに、信多先生とも初対面であったが、今思ひ出すと、ことばを交わすこともほとんどなかつたのではないか。たゞまさにこのような方が学者といえるのであろうといった印象で、対座すると背筋を伸ばさざるをえないような謹厳さがあった。

私は縁あって国文学講座に身を置くようになり、これまでとは違つて身近に信多先生と接するようになつたが、初めの印象は誤りではなかつたことをあらためて感じるし、ますます学問に対する厳しさ、物事をおろそかにしない真摯な態度にしばしば感銘を受けもした。それと、私などには相似のできない人情家で、このようなところに学生から慕われる大きな要因があるのだろうと、はたで見ながら納得もしていいる次第である。

信多先生は、評議員、学部長の要職も勤められ、国文学講座だけではなく、広い視野と大きな立場から大学のあり方を考えてこられた。つねづね大阪大学のよさを語り、将来への確かな展望を口にもなさつたが、それは長い年月の間、教育研究の環境を整える努力を

なさつてきたためでもあるう。私はそれを聞きながら、あまりにも大阪大学に対する無知を恥じるとともに、今さらながら嘗々と築かれてきた歴史と伝統の重みを痛感し、これはぜひとも継承し、発展させなければならないと、思いを新たにしているところである。

信多先生のご専門は日本近世文学、とりわけ演劇研究においてすぐれた業績をあげていることは広く知られているであろう。先年角川賞を受賞した『近松の世界』は、近松初期の淨瑠璃から元禄歌舞伎などを対象とし、近世の演劇史研究の金字塔といってよく、これは国文学講座においても名著なことで、身をもって搖るぎのない伝統を構築なさったことになる。そのほか、フィールドワークの共同研究による『人形淨瑠璃舞台史』や『近松全集』など、多くの貴重な研究を積まれてきた。

国立大学は、貴重書のコレクションに見劣りがするが、大阪大学として自負できる一つに赤木文庫旧蔵の古淨瑠璃本百冊がある。この購入には信多先生のなみなみならぬご尽力があつたようで、その後詳細な解題を付した冊子本も出版されている。また、現在では国語国文学会の研究誌として着実に発刊されている「語文」も、一時は停滞気味だったが、あらたな体制を整えて今日のような姿にしたのも、信多先生の率先による組織作りからの決断による。

今日、全国的に大学は改革の時代となり、古い伝統のある大学といって安閑としてはおられない状況にある。教養部が解体して文学部は人数が増え、国文学も所帯が大きくなってきた。平成七年度からは学部大講座化が実施され、やがて大学院大学に向かっていく情勢にあるだけに、歴史をよりかえりながら、将来をきちんと見通し、適切に処理する能力が求められるであろう。動きの激しい時代の到来に、信多先生のような方こそ必要なのだが、定年という時間は待ってくれない。信多先生の発展された数々の伝統を、残された私どもが継承し、さらなる国文学講座の伝統を築くことが使命であろう。その推移を、今後とも大阪の地にあって、あたたかく、また時には厳しく見守ってほしい。先生の一層の御健勝を祈って、ささやかながら本誌を御退休の特集号とし、学問の薰陶に浴したく思っている。

（大阪大学助教授）